

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成21年度技術情報について

平成20年度技術情報第1号を発表したので送付します。

平成21年度技術情報第1号

平成21年 7月31日
徳 島 県

紋枯病の発生状況、発生生態及び防除上の留意点について

7月上旬頃まで少発生で推移していた紋枯病が、7月下旬になり急増しています。県下全域で見ると概ね平年並の発生となりますが、激発圃場も散見されています。7月31日発表の1ヶ月予報において、気温、降水量ともに平年並の確率が高く、晴れの日が少ないと予想されており、発生量の増加が懸念されます。現地においては発生状況の把握に努めるとともに、適切な防除指導をお願いします。

1 発生状況

7月上旬(7月8～10日)の巡回調査では、県下全調査地点において発生が認められなかった(平年:25.0%,5.4%)が、7月下旬(7月27～29日)の巡回調査では急増しており、発生圃場率が43.3%、発病株率が17.3%(平年:53.1%,15.6%)となった。東部及び北中部では、発病株率が80%を超える激発圃場もあり、第2葉鞘まで上位進展している株も見られた。7月31日発表の1ヶ月予報では、気温、降水量とも平年並の確率が高く、晴れの日が少ないと予想されていることから更なる上位進展が懸念される。

	発生圃場率	発病株率
東部	16.7%	13.3%
山間部	未確認	-
北中部	53.3%	24.8%
西部	57.1%	9.7%

東部	徳島市、小松島市、阿南市
山間部	佐那河内村、那賀町
北中部	鳴門市、藍住町、板野町、上板町、阿波市、石井町、吉野川市
西部	美馬市、三好市、東みよし町

2 発生生態

紋枯病の伝染源は菌核である。前年に形成された菌核は刈株内や周辺土壌で越冬する。翌年の代かき作業等によって菌核が浮上し、稲苗に漂着し、気温が22～23℃を超え株間湿度が高くなると、葉鞘内へ侵入し始める。病斑から菌糸を伸ばして隣接の茎葉に付着したり、葉鞘を伝って上方に伸びたりして、新しい病斑を作りながら蔓延する。伝染源が前年に圃場内で形成された菌核であるので、前年に発生が多かった圃場では翌年の発生も多くなる傾向にある。

発病適温は22～34 であるが、最適温度は30～32 である。発病可能湿度は96%以上であり、最高分けつ期以降になると稲が繁茂して株内湿度が高まり、菌の繁殖、侵入に十分な湿度になる。出穂後曇雨天が3日以上続くと株内で高湿度が維持され、上位進展が進む。曇雨天が更に続くと、菌糸が葉から葉へと伸び株間感染が起き、発生の厳しいときには坪枯れ症状を呈する。

3 防除上の留意点

病斑が上位葉鞘に進展してくる穂ばらみ期～出穂期が薬剤防除の適期である。薬剤が病患部の葉鞘に十分付着するように、株元をねらって散布する。

発生状況は圃場によって異なるので、圃場を見回り、病斑が第3葉鞘まで達している場合は、早急に防除を実施する。

防除は県植物防疫指針に基づき、使用基準をよく確認(収穫14日前までの剤が多い)し、収穫時期を勘案の上、適切な剤を使用する。

普通期水稲紋枯病の年次別発生面積(ha)

